

令和6年度
産業厚生常任委員会
行政調査報告書

産業厚生常任委員会 行政調査報告書

1. 日程及び調査先

日 程：令和6年10月21日（月）～23日（水）

調査先：千葉県木更津市、富里市、八街市、館山市

2. 調査事項

- (1) 10月21日(月) 午後1時30分～3時 千葉県木更津市
「きさらづ健康アプリ『らづFit』の取り組みについて」
- (2) 10月22日(火) 午前10時～11時30分 千葉県富里市
『富里スイカ』ブランド化のための取り組みについて」
- (3) 10月22日(火) 午後1時30分～3時 千葉県八街市
「新規就農者に対する支援について」
- (4) 10月23日(水) 午前10時～正午 千葉県館山市
「食のまちづくり推進について」(館山ジビエセンター視察)

3. 参加者

委員長 菅野 喜昭 副委員長 菅藤 昌己

委員 大類好彦、伊藤 浩、鈴木 清、鈴木由美子、高橋隆雄

4. 報 告

《委員長 菅野喜昭》

(1) 千葉県木更津市 「きさらづ健康アプリ『らづFit』の取り組みについて」

ア 調査結果

らづFitの概要について

- (ア) 目的 歩行運動を推進し、運動習慣の獲得を図る。
- (イ) 内容 スマートフォンにある歩数計アプリとアクアコインアプリを連携し、要件達成でポイントを付与する。
要件 a 7000歩／1日達成→5ポイントを付与
要件 b 同月内に7000歩／1日を10回以上で10ポイントを付与
- (ウ) 登録者数
令和2年度＝2170人
令和5年度＝8244人
令和6年度＝9121人(9月末現在)
- (エ) 利用者年代
40代＝25.3%、 50代＝23.0%、 30代＝19.7%
60代＝10.4%、 20代＝8.9%、 70代＝5.7%
- (オ) 事業の効果

- ① らづFitを利用してからの歩数の変化
増えた=45.5% 変わらない=50.6%
- ② この1年間での健康づくりの取組状況
健康のために歩くようにしたり、階段を使うようにした=80.8%
1回30分以上の運動を、週2回以上行った =39.2%
減量し、適正体重になった(近づいた、維持できた) =32.0%

イ 所感

らづFitの登録者数は、令和6年度末で推定1万人を数え、総人口約13.5万人の7.4%に達しており、大変活発に運動しており、健康に気を使っているように思われる。当市においても健康増進課でも実施しているものの、さらに実施要領等工夫して、各種健康フェスティバル等に多数の参加者を募るよう要望したい。

(2) 千葉県富里市 『富里スイカ』ブランド化のための取り組みについて」

ア 調査結果

(ア) 富里市すいか条例

市の特産品であるすいかを、市、生産者、事業者、及び市民が協力して更に広く知らしめ、郷土への愛着及び知名度の向上を図ることにより、富里のすいかを守ることを目的に令和3年に制定された。

(イ) すいか生産支援

a 生産意欲の向上及び生産者減少の抑制を図り、産地維持を目的として、平成23年度より『すいかの里生産支援奨励金』を交付。

b 農業用廃プラスチック処理への支援

令和6年度予算 22484000円

(ウ) 有害鳥獣からの農産物被害防止対策への支援

市有害鳥獣被害防止協議会活動へ国の鳥獣被害防止総合対策交付金を活用し補助。また、電気柵設置や狩猟免許取得に係る費用の一部を補助。

(エ) 新規就農者確保の取組

① 市・県・農協・生産者・企業が一体となった支援体制
(富里市農業指導連絡協議会)

② 富里農業のブランド化

○ 『すいか』や『にんじん』を中心に市・県・農協・生産者・企業が一体となってPR活動を実施

○ TV、新聞、ラジオ等のマスコミを活用した情報発信

○ すいかまつり、産業まつり、読売ジャイアンツへのすいか贈呈

③ 産地体験会

労働力確保に向けて、まずは受け入れ側の意識改革と体制づくりを進め、体験会を通じたすいか栽培への理解と普及に努めた。

○ 第1回産地体験会：令和6年4月27日、7月6日

○ 第2回産地体験会：令和6年8月10日、9月14日

④ 食農学習

市内小学生を対象に、栽培体験を通じて、農業の面白さ、難しさ、収穫の喜びを感じさせ、食が持つ多様な役割の大切さを伝えた。

(オ) 後継者の育成の取組

富里市農業後継者対策協議会を中心に、就農の促進を図るとともに研修等の集団活動を実施して、農業者の育成に努めている。

(カ) 軽トラ楽市

『TNネットワーク』主催の『軽トラ楽市』を市の観光交流拠点『末廣農場』にて開催し、生産者と消費者との交流を図っている。

イ 所感

調査結果にもあるように、『富里スイカ』ブランド化のため、さまざまな取り組みが行われている。

まずは、『すいか条例』の制定である。これは、すいか生産者及び作付面積の減少(平成17年から令和2年までの15年間で半分以下)を食い止め、市の宝である『富里のすいか』を守るため、生産者、市民、事業者、行政が一体となるために令和3年に制定されたものであり、市の危機感と意志のあらわれである。

平成23年から『すいかの里生産支援奨励金』を交付している。交付基準は、栽培面積が10aを超えるものにつき1a当たり1000円で、10a10000円交付される。現在もなお継続されており、令和6年度の交付額は、約160haで約1317万円を計上している。農業用廃プラスチック処理の支援についても、約半額を補助しており、令和6年度の予算は約2248万円を計上している。

令和6年度の後継者がいる農家は約4割となっており、『すいかの里生産支援奨励金』の交付は、生産意欲の向上と生産者減少・後継者育成に寄与するものであると考える。

当市としても、尾花沢すいかのブランド化の維持・推進のためにも生産者減少・後継者育成が必要かつ重要であり、『スイカの生産支援』について検討する必要があると考える。

(3) 千葉県八街市 「新規就農者に対する支援について」

ア 調査結果

(ア) 八街市農業支援センターの設立経緯と事業内容について

平成23年に協定を締結し設立し現在に至る。センター全体の見学を実施した。

(イ) 農業インターンシップ事業

千葉大学農学部と協定を締結し、事業に取り組んだが現在は活動はほとんどない状態である。

(4) 千葉県館山市 館山ジビエセンター「食のまちづくり推進について」

ア 調査結果

(ア) 館山市の『食のまちづくり』について

たてやま食のまちづくり協議会は、農漁業・観光業・商工業など、異業種間の横断的連携を目的として、平成25年10月に発足した。

この組織は、農協、漁協、観光協会、商工会議所、商店会連合会直売所連絡協議会など、各界の主要メンバーが会員となっている。

主な業務内容は、地産地消推進のための情報発信や、市のまちづくり事業に対する助言や意見提案などがある。

平成27年2月に、『たてやま食のまちづくり計画』を策定し、食のまちづくりを推進している。

その一環として、市が指定管理したジビエセンターを設立した。

(イ) 館山ジビエセンター設立と取組内容について

有害鳥獣の捕獲後の個体は埋設処理が基本であり、捕獲者にとっては大きな負担となっていた。このため、捕獲後の処理負担の軽減を目的にセンターを設立した。

これとともに、食のまちづくり推進・地域活性に向けた資源として、ジビエ活用を提言した。

適正に処理したジビエをご当地食材としてのブランド化を目ざした。

取組としては、館山市ジビエ加工処理施設整備事業として、アルコグループを指定管理者として選定し、捕獲者からイノシシ等を引き取り食肉として販売する。有害鳥獣の減少と資源として活用する一挙両得狙いとしている。

(ウ) 館山市有害鳥獣処理施設について

ジビエセンターと同様に、捕獲個体の処理方法は埋設が基本であり、埋設作業に対する労力や埋設地の確保及び将来的な環境汚染が問題点であり、その解決手段の一つとして焼却施設を設立するに至った。

イ 所感

ジビエセンターについては、旧収集管理センターの建屋の一部を改修したものであり、施設整備費用として1200万円程度で済んでいる。こういった空き家等があれば、施設としては安価に取得は可能と判断できる。また、焼却処理施設は約1億円かかっており、市の負担も約5000万円かかっており、財政的に負担が大きいと感じる。

おわりに

この度の千葉県の木更津市、富里市、八街市及び館山市ににおいて、それぞれ視察研修させていただきました。所感でも述べておりますが、今後の市政発展のため政策提言等に活かしてまいりたいと考えております。

《副委員長 菅 藤 昌 己》

(1) 千葉県木更津市 「きさらづ健康アプリ『らづFit』の取り組みについて」

- この電子地域通貨を活用した、健康アプリ『らづFit』は、市民に大きく認知され歩くことによる健康効果は大きいと思われた。気軽に、歩くことにより、自分の健康と医療費、介護保険料の軽減、そして、市の財政にも将来大きく寄与するものである。
- 電子地域通貨『アクアコイン』は、利活用のアイデアコンテストを実施、ポスターコンテストを開催していた。あと子供向けのパンフレットの作成し普及活動しており、今後益々、幅広く利活用がなされると推測された。
- このアクアコインを利用した地域貢献プロジェクトが進行している。この地域通貨を利用した場合、支払額の1%がオーガニック給食基金に入る仕組みである。子供たちにおいしいオーガニック給食につながると考えると、市民の利用にも弾みがつくと思われた。
- ICチップ（腕バンド）を利用した、決済を導入開始しており、益々便利な買い物ができる体制を構築していた。時代を先取りしている木更津市を今後も注視していきたいと思った。

(2) 千葉県富里市 「『富里スイカ』ブランド化のための取り組みについて」

- 富里市は、尾花沢市をスイカの産地として注目をしており、五十嵐博文市長自ら会議の前に、挨拶をされ、今後とも産地間の友好を深めていきたいと述べられた。農林課でも、尾花沢市を視察研修したいと、連絡をしたが、水害の時期とかさなり、実現しなかった。来年是非、研修したいといわれていた。今後、議会、行政間、農家間で、交流があってもいいと思った。
- 尾花沢市のスイカの品種は、祭ばやしを中心に作付けしているが、富里市では、20種の品種を栽培していた。春すいかや抑制栽培スイカをつくっており、夏スイカの尾花沢市とは少しちがっている。本市も、抑制栽培として、9月頃までのスイカ生産も検討が必要であると思う。
- ブランド価値を高めるため、スイカ条例（理念条例）、PR、儲かる農業として位置づけている。尾花沢市もスイカ条例などや、スイカの日本一宣言をするなど工夫が必要だと感じた。
- 農業用廃プラスチック処理に力を入れていた。本市も多くのマルチを使用しており処理に援助が必要である。
- スイカのオブジェが市役所前にあったが、本市においても、市役所前や、バイパス沿いにスイカと牛のオブジェが必要である。
- 富里スイカロードレースを6月行い、すいか食い放題を実施して好評であるが、尾花沢牛肉まつりをスイカの宣伝かねて、尾花沢牛スイカまつりと名称を変更してもいいかと思った。

(3) 千葉県八街市 「新規就農者に対する支援について」

- ピーナッツを中心に、観光農園が盛んであり、多くの観光客を迎えていたが、尾花沢

市においても観光農業をいかに進めるかが大きな課題である。夏分のスイカにかんする観光を創出するべきだと思った。

- 八街市には、農業者支援センターを古くから設置して、農業を振興してきた経過がある。尾花沢市は、スイカ大学校を今年からはじめたが、継続して実施することと、新規農業者を大きく応援し尾花沢スイカのブランドをまもっていかなければならない。
- 農業インターシップとして千葉大学農学部と協定して、実習することで単位をもらえる仕組みとなっていたが、学生が八街市に残って農業後継をするケースはないとのこと。大学との研究の連携もないという。せつかくのチャンスをのがしていると感じた。
- 東京などの大消費地を持つ都市の近郊農業で粗生産額を多く、気候も温暖で地の利が大きい。尾花沢市とは環境が違いすぎるが、まだまだ工夫することはいっぱいあると感じた。
- 周年農業については、当たり前のように実施しており、豪雪地帯の尾花沢市とは、農業環境に差があった。
- 福祉農園を実施していたが、これから、障がい者に農業で働く環境づくりをどうするかを検討し作っていかねばならないと感じた。

(4) 千葉県館山市 館山ジビエセンター「食のまちづくり推進について」

- 館山ジビエセンターについては、『食のまちづくり』とリンクしうまくジビエ料理として販売まで連結している。相当な、大型獣の捕獲が必要であり、尾花沢市においては、難しいと思う。
- 有害鳥獣焼却処理施設については、広域の市町村で設立すべきであり、単独の市町村では、難しいと思う。
- 武蔵野美術大学と連携し、たてやま食のまちづくり協議会を立ち上げ、ビジョン、ブランド、プロモーションを提案している。千葉県の市町は、大学と連携しているところが多いと感じた。やはり、本市も東北芸術工科大学と連携して、一時、市のPRや案内看板についてやってきた経過があるが、再度、連携することも検討が必要だと感じた。また、新庄市に設立された東北農林専門職との共同研究や実習単位を尾花沢市内の農家でとれる体制にするのも必要である。
- 館山市では、指定管理している会社に、地域おこし協力隊で鳥獣関係を経験した人がたまたまいた。人材やハード面の対策も必要であり、館山市のような体制をつくるには、大きな課題があると感じた。

《委員 大類好彦》

(1) 千葉県木更津市 「きさらづ健康アプリ『らづFit』の取り組みについて」

木更津市の人口は、約 137,000 人と尾花沢市の約 10 倍である。この度、電子地域通貨アクアコインとアクアコインの歩数計機能らづFitについて学ばせていただいた。アクアコインの概要は、木更津市と信用組合と加盟店の 3 者によって構成され、経費は信用組合で賄ってもらっている。信用組合のメリットを質問したところ、新しいお客さんを増やせることだと思われるが、開発費はかなりの高額と思われ社会貢献の意味合いが多いとのことである。利用者のメリットは、お財布いらずのスマート決済・感染リスク軽減・いつでもどこでもいくら使ったか履歴が残ること、行政ポイント各種ポイントの付与などである。加盟店のメリットは、必要なのはスマートフォンのみで、ほかの端末不要。翌月に入金。送金は 24 時間可能など、今までのポイントカードやクレジットカードのような手続きが不要なことである。尾花沢市では雪ん子カードやマイマイカードがあるが、導入時に端末購入を各店舗で行いかなりの金額を負担したと聞いている。スマートフォンを利用することにより初期費用が掛からないのは大きなメリットである。また、らづFitの歩くことによるポイントを貯め、1 ポイント 1 円で利用できる。歩くことによって医療費の軽減があるが質問したところ、今のところ軽減まではいかないものの歩く習慣が付き健康に気を遣うようになっていくとのことである。尾花沢市の商店街にとって考えると、協力してくれる金融機関などがあるかが難しい問題である。

(2) 千葉県富里市 「『富里スイカ』ブランド化のための取り組みについて」

富里は、「馬のふるさと すいかの里 とみさと」をキャッチフレーズにしています。市役所の玄関には、スイカをデザインの郵便ポストがありこだわりを感じた。市長が会議の合間を縫ってあいさつに来てもらいました。来所のお礼と、これを機に尾花沢市とのお付き合いを活発にしていきたい旨の話があり、学びあいの心と切磋琢磨して高めていきたい意欲が伺えた。昭和 11 年には、天皇にすいかを献上している。近年は、秋スイカにも力をいれている。抑制栽培をして秋に出荷する。暖かい土地の発想であり尾花沢市では考えられない発想だと思う。スイカの品種を尋ねたところ、20 種類以上の品種栽培されているそうである。東京都心に 50 km と近いことで尾花沢市とは事情が違う。意外なことは、ニンジンが全国 1 位の生産量でした。頑張っているところは、何事にも一生懸命取り組んでいると感じた。また、すいか条例もあり、A4 判 1 枚の量でもあるので尾花沢市でも参考にして作るのもいいと思う。

(3) 千葉県八街市 「新規就農者に対する支援について」

八街市では、新規就農者にたいして生産技術、補助金の制度の相談するために、八街市農業者支援センターを開設した。説明を聞き、尾花沢市も農業者支援については負けていないと感じた。視察研修の受け入れはあまりないというお話があり、統計資料は配布されたが説明資料がないため話を書き留めるのが大変でした。当市でも気を付けなければならないと感じた。千葉大学と協定書を締結して農業体験、手伝いをしてもらっているが、就農者はいない。今後は他の農業体験も考える。親元就農も 2 万円を 2 年間支

援する。少額を長く支援するという考え方はいいと思った。視察の受け入れに慣れている市、慣れていない市様々あるが皆さん一生懸命に対応していただいた。

(4) 千葉県館山市 館山ジビエセンター「食のまちづくり推進について」

館山市の年間平均気温は16度と高く、200万人が訪れる観光のまちである。農業と産業、海の幸山の幸、地元の野菜も豊富である。道の駅グリーンファーム館山も今年2月16日オープンした。小規模だが、今後の様子を見ながらリニューアルをしていく予定。

館山ジビエセンターは、令和5年度は約2000頭のイノシシを捕獲している。約3割が食用・4割が焼却・3割が土に埋められている。経営は苦しく4年続けての赤字で今年は何とか黒字にできる見込みである。やはり公共の施設援助、補助金などないと厳しいのが現実のようだ。

有害鳥獣焼却処理施設は、約1億円で施設整備され、国県の補助は半分弱である。食用に出来ないイノシシ・シカ・キョンなど冷凍保管し、焼却炉の能力に合わせ400kgになったら焼却する。灰や骨は鉄砲の玉の鉛が残留しているため専門の業者に処分をお願いしている。土に埋めるだけだと、水質汚染につながり焼却に踏み切った。温暖な気候、山が多いなどの自然環境で鳥獣が増えやすい。尾花沢市も将来的にはイノシシなどが増え、焼却施設が必要と思われる。

忙しい中、視察を受け入れていただいた4つの市の皆様に感謝いたします。

《委員 伊藤 浩》

(1) 千葉県木更津市 「きさらづ健康アプリ『らづFit』の取り組みについて」

この事業を導入して一番効果のあった事は、市民の健康習慣がアップした事だそうで、市民の関心をどうすれば高められるのかをテーマに取り組んでいた。やはり原点はいかに参加者を引き寄せるのかという事がポイントになると考える。

(2) 千葉県富里市 「『富里スイカ』ブランド化のための取り組みについて」

尾花沢市と同様にスイカが目玉商品であるが、驚いたのはスイカのブランド化に徹底的に取り組んでいた事である。スイカ条例を策定し、スイカまつりやスイカマラソンを始め、あらゆる面でPRを継続している点は見習うべきと考える。ハウス栽培より路地栽培面積が多かったのは意外であった。市としても是非交流視察などを進めて欲しいと考える。

(3) 千葉県八街市 「新規就農者に対する支援について」

新規就労者に対しては一時金では無く、2年間にわたって支援している(月額2万円)。当市の事業でも再確認する必要性もあるのではないかと思う。鳥獣被害対策も尾花沢と似たような対策を進めていた。

(4) 千葉県館山市 館山ジビエセンター「食のまちづくり推進について」

農業人口が減少している中で、市内で生産される多種多様な農産物の地産地消を進めるために協議会を作成し、販売拠点も設けて地域力をアップさせている。特に個体数が増えているイノシシの処分場運営やジビエ化にも取り組んでおり、参考になる課題が多くあった。

《委員 鈴木 清》

(1) 千葉県木更津市 「きさらづ健康アプリ『らづFit』の取り組みについて」

「らづfit」は、健康維持増進のため必要な「歩く」「運動する」を推進した歩数計健康アプリ機能だ。1日7000歩で5ポイントの電子地域通貨「アクアコイン」がゲットできるというもの。しかし、利用者は40代50代30代の順に多いが、高齢者の利用は、スマホを使う点でもハードルがあり、少ないようだ。本市の健康増進を考えた場合、冬季に高齢者の雪かきが多いため、雪かきを「おばねfit」としてポイントができないだろうか考えた。木更津市の考え方を参考としたい。

(2) 千葉県富里市 「『富里スイカ』ブランド化のための取り組みについて」

市役所前のすいかのオブジェが私たちを歓迎。すいか条例・スイカマラソンなど、スイカに関するありとあらゆるものの力の入れ方・熱量に圧倒される。「富里市すいか条例」は作業は重労働だが、富里スイカを守ることを基本理念とし、行政・生産者・事業者及び市民の役割を明らかにした全国初の条例だ。本市でも、スイカ条例を作る価値はある。スイカの里、生産支援奨励金・富里秋スイカ・農業用廃プラスチック処理への支援等手厚く、農業そのものすべての支援とブランド化を進めていることに感心した。本市では尾花沢すいか農学校の取り組みがあり、富里市長の歓迎の言葉にあるように、両市の交流が進めば良いと思う。

(3) 千葉県八街市 「新規就農者に対する支援について」

八街市では、親元就職農者を中心とした新規就農や生産技術・補助金の制度など農業の相談に対応するため、市役所農政課に「八街市農業者支援センター」を開設している。県の農業事務所・農協・農業委員会と連携し、支援に当たっている。千葉大学農学部とは、「農業インターシップ事業」の協定書を結んでいるものの、学生の単位取得のため、5日間の実習があるようだが、研究実績はまだないとのことであった。やはり、確とした農業者になろうと考えている山形県の農業大学校の学生とは違い、難しい面があるようだ。本市のスイカ農学校の取り組みは、農業大学校との連携をさらに進めるべきと確信した次第であった。

(4) 千葉県館山市 館山ジビエセンター「食のまちづくり推進について」

滝沢馬琴の読本「南総里見八犬伝」の舞台である館山市は人口43,000人。どうすればイノシシなどの有害鳥獣を駆除し、ジビエセンターを作れるのか、お話を伺った。館山市では、令和5年でイノシシが2192頭と激増。有害対策と、ジビエのブランド化のプロモーション事業には、市の「食のまちづくり事業」の計画が後押しをしている。食のまちづくり協議会を立ち上げ、食の豊かさを活かし、地域の魅力アップにつなげている。有害鳥獣の捕獲者・加工処理・焼却処理・飲食店での地産地消(道の駅グリーンファーム館山)。

子供たちの自然と食教育へとつなげている点が素晴らしい。これらの事業は、某著名人の20億円のふるさと納税が起点となっているが、思い切りの良い決断が、ジビエセ

【産業厚生常任委員会】

ンターを作らせたものだ。仙台市出身の協力隊の尽力も特筆すべきものだ。果たして本市でジビエセンターを作れるか否や。拙いが、協力隊の沖さんへの尊敬を込めて一句。
「猪をさばく人や供養の塔建てて」

《委員 鈴木由美子》

(1) 千葉県木更津市 「きさらづ健康アプリ『らづFit』の取り組みについて」

地域経済や地域コミュニティの活性化の観点から、君津信用組合が導入し初期費用やランニングコストも負担して頂いているとの事で、民間投資の土台がある。歩数機能アプリで「ポイ活」を取り入れ健康増進を目指しながら、地域経済活性化が目的であり、尾花沢市の「おばね元気ポイント」事業との違いがある。本市は現在、地域経済活性化まで見据えてはいない。

(2) 千葉県富里市 「『富里スイカ』ブランド化のための取り組みについて」

スイカ産出額は本市の半分にも満たないが首都圏の台所を担っており、消費者ニーズを掴んでおり品種が多く取りそろえている。生産額1位は「にんじん」であるのに「全国屈指のすいかの里」を掲げ、有名スポーツチームや日本大学との関りをはじめ「すいかまつり」「富里スイカロードレース大会」を開催している。また、天皇陛下へ献上した歴史を誇りにしている。

一方本市は「夏スイカ生産日本一」を掲げているが、スイカに特化した祭りは実施されていない。このことについて市民より声を頂いているので、課題である。更に本市に於いても、天皇家にスイカを献上してきた歴史があるにも関わらず、関心が薄く興味を抱かないことは残念に思っているところであり、先人たちが苦労して桑畑や荒れ地を開墾し、失敗を繰り返しながら今の生産技術に辿り着いた歴史は重い。

ストーリー性を持って生産に取り組むことも必要ではないだろうか。そうでなければ過去のゴールドラッシュの時代と同じで、生産できなくなれば一気に人がいなくなってしまうか懸念される。

(3) 千葉県八街市 「新規就農者に対する支援について」

千葉大学農学部と協定し、農業インターンシップ事業に取り組んでこられたが、八街市の課題である農業の後継者不足解消には至らず現在事業は行っていないのは残念であるが、そもそも農学部だから新規就農するとは限らないので、研究分野などの交流事業が適しているのではないかと感じた。

(4) 千葉県館山市 館山ジビエセンター「食のまちづくり推進について」

指定管理者である合同会社アルコの沖様が首都圏などの飲食店と繋がっていることや、リゾート地・観光の街であるからこそ猪駆除対策の副産物としての食材提供が可能と感じた。本市で検討するには、食肉を取り扱う店舗・レストランを確保できるのかが課題であると思う。

《委員 高橋 隆 雄》

(1) 千葉県木更津市 「きさらづ健康アプリ『らづFit』の取り組みについて」

木更津市で取組んでいるアクアコインは、地域経済やコミュニティの活性化等、地域価値の発掘といった地域の持続可能な成長を後押しする手段とした地域通貨である。これに健康維持増進のために必要であると言われる「歩く」「運動する」などの身体活動を推進し、運動習慣の獲得を図ることを目的とした歩数計アプリが「らづFit」で、それにポイントを付与することでアクアコインのアプリが必要となる。

「らづFit」はスマートフォンにそのアプリを登録する必要があり、登録者の年代をみると30歳から50歳までの利用者が多くなっているようである。年齢が高くなるにつれその登録者数は減少していることから、高齢者のスマートホンの所持率とアプリ登録者数を増やしていくことが課題であると感じた。

健康維持増進に対する取り組みは基本的には木更津市と当市において考え方は一緒であり、また共通した課題となっているのが、参加者の拡大であり、そのなかでも男性の参加者が少ないといった共通した課題である。

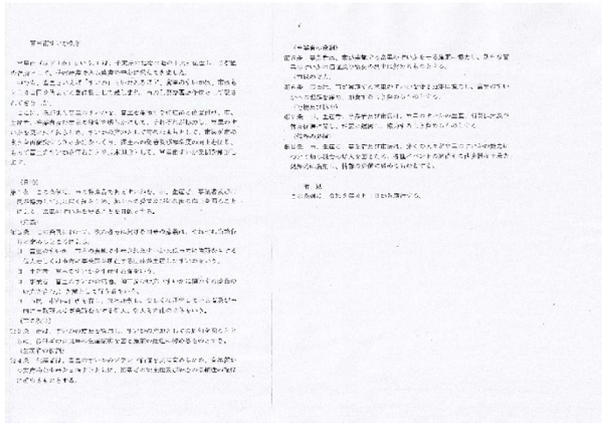
「らづFit」では特典として健康増進事業に参加した場合、ポイントが付加されるが、まずはこのポイントが付加される「アクアコイン」への登録が必要であるため、この地域通貨に対しての地域の理解と利用拡大が大きな課題であると感じた。現在多様な電子決済の方法があるなかで地域でしか使えないこの「アクアコイン」、地域のいろいろな決済やポイントを今後もいろいろな事業で増やしていくということであるが、それには地域住民の理解と地域愛が重要であると考え、今後もいろいろな事業でポイントを検討していくとのことであるので注視していきたいと思う。

(2) 千葉県富里市 「『富里スイカ』ブランド化のための取り組みについて」

富里市においても尾花沢市と共通した問題となっているのが、生産者の高齢化、離農となっているようだ。その一つの対策として市をあげて設置されたのが「富里市すいか条例」である。皇室にも献上しているこのすいか生産を守ろうと、この条例が設置されている。また、町のなかにはスイカ柄のポストやモニュメントが設置され、町全体でアピールしているのがわかる。当市においては、「すいか大学校」や新規就農者に対する助成等、富里市に引け劣らない取組を行っている。町全体ですいか生産地として後押しするには、富里市のように「すいか条例」であったり、モニュメントを設置したりといったことが必要ではないかと思われる。

また、すいか栽培作業省力化研究において、大学と連携し作業の効率化にも取組んでいるようである。この取組において注視していきたいと思う。

富里市においては、当市の取組に関心があるというお話をいただいた。生産地域のライバルでもあるが、お互いに情報交換しながらすいかの品質向上と生産向上につなげていければと思う。



すいか条例



庁舎前郵便ポスト

(3) 千葉県八街市 「新規就農者に対する支援について」

八街市において、大学と協定を結び体験実習に取り組んでいるようだが、新規就農や定住には大きな成果はまだ結びついていないようである。しかしながら、こういった取組は決して無駄ではないと思う。新規就農に限らず地元就職し定住するには大学や高校の影響は大きいと考える。当市において北村山高校は重要な学び舎であり、それこそが若者が定住する一つの要因となるものと考え。また、山形県農業専門職大学は就農を目指す人たちにとって重要な大学であると改めて感じた。

八街市の取組では学童農園や農福連携（障がい者の自立支援に繋がる農業就労）等を行っている。こういった活動をすることは、地域とのつながり、自立支援や子供たちの農業体験で農業へ関心を持つためには、大変良い取り組みであると思う。

また、外国人労働者は少しずつではあるが増加傾向にあり、文化や生活習慣の違いや言葉の問題などでなかなか大変であるといったお話であった。当市においても今後増加するであろう外国人労働者に対する取組も考えていく必要があると思う。

また、ワインやブルーベリー等新しい事業にも取り組んでおり、就農するにあたりいろいろな作物や製品にも挑戦しているようである。気候変動より農作物への影響がある現在、当市においても品質を落とすことなく、また新たな品種や新たな作物についても考えていくべきだと感じた。

(4) 千葉県館山市 館山ジビエセンター「食のまちづくり推進について」

鳥獣被害による農作物の被害は当市のみならず千葉県内においても深刻な問題である。館山市においても例外ではなく、特にイノシシによる被害が増加しているようだ。

館山においては温暖な気候で多種多様な農水産物が採れ、この食の豊かさを活かして地域の魅力をアップしようと「たてやま食のまちづくり」に取り組んでいる。その“食”にこだわり、駆除したイノシシ等も食肉に加工している。館山ジビエセンターにおいては、イノシシ等の捕獲した個体を食肉として販売している施設であり、食肉にならない個体については焼却処理施設において処理している。

尾花沢市においても鳥獣被害は深刻な問題であるし、近隣の市町村のみならず山形県内においても深刻な問題であることから、当市においては館山市のようにジビエセンタ

一や焼却施設等、市単独でそういった施設を管理運営するのではなく、広域事業として県での主導が適していると考える。

「たてやま食のまちづくり」の協議会には館山市においては武蔵野美術大学にも協議会のメンバーとして参加していただき、新しいアイデアや地域の方の刺激となり、よりよい関係のもと取組んでおられるようである。そういった協議会のメンバー構成もこれから必要であると感じた。



駆除した鳥獣の焼却炉



焼却炉の性能表



食肉として加工する施設内